



七高僧シリーズ その5

# 寺報

2020年(令和2年)

No. 294

# 5月号

Zenkyo-ji monthly  
Communications Paper  
En [えん]

# 縁

613年～681年(日本は飛鳥時代、大化革新があった頃)

著作:五部九巻(特に『観経疏』)

特色:南無阿弥陀仏の一つで往生することをあきらかにし、  
南無阿弥陀仏を深く信じる信心の道をすすめた。(古今楷定)

略伝

善導は、混乱を極めた隋の時代の末期、現在の山東省にあたる地で生まれ、幼くして出家します。

末法の世に生まれ、修行の及ばぬ身であることを思い、末法にかなった道を求めて、数々の經論をひもといいていた善導は、『観無量寿經』に心をひかれ、一心不乱の修法を重ねましたが根本の信念が得られません。

善導は、各地に名僧をたずね、道を求めるようになりました。

29才の時、善導は玄忠寺の道綽に会うことができました。そのとき、道綽は80才。

道綽の念佛の声は朗々として善導の心を打ちました。

5年の師弟生活のうちに、善導の念佛往生の信念は確固たるものとなりました。

当時は、唐代初期の中国仏教の大盛期であり、各地に有名な高僧を輩出した時代でした。

善導は唐の都、長安に入り、光明寺に住んで広く大衆に門戸を開き、念佛をもっぱらに勧めます。その結果、「長安の城中、念佛に満つ」といわれるほど念佛が盛んになりました。

善導は『観経疏』を著すことによって、これまでの『観無量寿經』についての解釈を改め、念佛往生こそ末法悪世の人々のための仏の本意であることを明らかにしました。これを善導流の念佛といいます。

善導は持戒が非常に厳格で、三十余年のあいだ自分の寝所を定めず、しかも念佛の声は口を絶えず、眼をあげて女人を見ないというほどであったと伝えられています。

法然上人はことのほか善導を敬慕され、阿弥陀仏の化身とまであおがれています。



善導禪師

講師部屋（本堂北側）から見た整備中の山



「やはりお寺は良いな」と感じてもらえるようにすること。  
のために、今できることをする。例えは、法要参拝者が無い時

今、私が思うことは、アフタ  
ーコロナ時、善教寺へ参拝して、

仕事も出来る限りのテレワー  
クがなされているようです。  
地元の佐伯葬祭では、葬儀のラ  
イブ配信サービスをされている  
とのこと。善教寺では、全く対  
応が出来ておりません。どんな  
ことが出来るか対策を考え中で  
あります。

## 住職レター

今年の桜は、例年よりも長く咲いていたように感じ  
ました。気候のせいでしょうか。コロナ騒動を心配し  
た桜が頑張つたのでしょうか。  
これから始まるゴールデンウイークは、いつもなら  
絶好の行楽シーズンですが、今年はステイホームとなる



重機で整備中

善教寺をお楽しみに。  
アフターコロナ時、進化した  
杜になればと思っています。  
が整えられる、気持ちが良くな  
る杜になります。

現在、本堂北側の山を整備中。  
『瞑想の杜（仮称）』として、心  
を整える。そして、私自身をア  
ップデート（進化）させること。